



Title	馬琴読本の筆耕による行末の区切りと用字の関係について
Author(s)	市地, 英
Citation	語文. 2020, 114, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85447
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

馬琴読本の筆耕による行末の区切りと用字の関係について

市 地 英

一・はじめに

平仮名文・漢字平仮名交じり文の写本や板本には、語末・一音節語と行末がかなり重なるものがある^①。そうした文献の表記には、語と語の切れ目を行末に合わせるため漢字・仮名字体を選び用いたと指摘されることがある。ただし、それは現代人の目から写本や板本の表記を観察した結果、書き手の意識的な文字使用を恣意的に見出している、という批判を免れない。

しかし、稿者が曲亭馬琴の読本の作家自筆稿本と、筆耕が清書を担当した板本の表記を比較対照したところ、行末及び行末近くにおいて、語を収めるための用字^③を行う筆耕がいたことを確認できた。そこで本稿では、馬琴読本の自筆稿本と板本の語と語の切れ目と行末の一致関係を明らかにした上で、板本の行末において自筆稿本から表記が書き換えられている用例に、行末の区切りを意識した文字使用を指摘する。

二・先行研究

行末までに語を収める漢字と平仮名の用法は、平仮名文・漢字平仮名混じり文の古い写本から近世後期の板本にまで指摘される。まず漢字表記について述べる。これは平仮名で表記される傾向のある和語を漢字表記にすることで文字数を減じ、語の分断を避けたと考えられる用法である。佐々木(二〇一八)は『徒然草』正徹書写本(永享三(一四三二)年)を、単語末と行末が一致する割合の高い、行移りに語と語の切れ目が意識された文献だと明らかにした上で、行末に一文字分のスペースしかない箇所^②に和語「ものかたり」を「物…語」(以下、用例を示す際に、原本に匡郭がない体裁の行末・行頭は「…」で表し、匡郭のある体裁では「一」で表す)と漢字表記した例を指摘する。「も…のかたり」と分断書写されるスペースしかないため、意味単位で行移りできる漢字表記にしたものと考えられている^④。すなわち、平仮名は表音

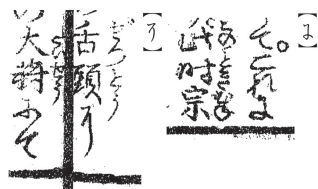


図1 質屋庫より
(画像は国文学研究資料館蔵 ナ4-135-1による)

文字ゆえ、行移りで分断されると一文字の語か二文字以上の語か分からず、離れた位置の文字を読み取って意味の区切りを把握しなければならない。表語文字の漢字は、二字以上の漢語中で行移りしても、意味のまとまりを把握しやすいためである。

文字数の増減とは異なり、仮名字体の形状の違いを利用して行末までに語を収めたとみられる場合もある。仮名字体の

形状は、例えば画数の多い【𠂔】【𠂔】等や、最終画を下に向けて伸ばす【𠂔】【𠂔】等は縦幅を要する。画数の少ない【𠂔】【𠂔】は小さく書かれがちである。その字体ごとに相応の字高があり、語表記の縦幅の調整が可能なものがある。こうした形状の違いを活かして、行末の余白に応じて仮名字体を選択し、行末までに語を収めたとみられる。

先行研究では行末までに一語を通常の仮名字体で書き入れると余白がやや広く、次に続く語を書き入れるには余白が狭い場合に字高の高い仮名字体を使用して余白を埋めたと考えられる例がある。それには虎明本狂言の【乃】【𠂔】(通常【の】【る】)【ハ】、断本『鹿の子餅』の《亭》《怒》を字母とする仮名字体(通常《天》《ぬ》)、馬琴読本『月氷奇縁』の【𠂔】【𠂔】(通常【ま】【と】)【𠂔】【𠂔】、『椿説弓張月』の【𠂔】【𠂔】

【𠂔】(通常【と】)【𠂔】【𠂔】(通常【る】)が挙げられる。

また、行末の余白が狭い場合に、単純な仮名字体・字高の低い仮名字体を使用したと考えられる例もある。

語の区切りを行末に合わせた表記という点はいずれの先行研究にも当てはまるが、虎明本狂言・断本では右のような仮名字体の使用傾向を、匡郭がなく行末の下辺が整っていることから、行末の下辺を揃えるレイアウトのための表記として見做す。一方で、文章がもともと匡郭で囲まれた馬琴読本に関しては、レイアウトとしての文字使用を考慮したとは考えにくく、行末の匡郭までに語を収めた文字使用と見做すことができる。

ただし、以上の先行研究に指摘される表記は、書き手によって意図したものか、単なる偶然によるものか、判断できない。

そこで注目したいのが、先述した馬琴読本の筆耕の表記である。近世後期の出版物は刊記に筆耕や彫り師の名が明記されるようになり、馬琴読本には、清書を担当した筆耕が明かな板本が存する。これに加え、馬琴の自筆稿本が豊富に残る。以上から、自筆稿本と板本を比較することで、特定の筆耕の用字を観察できる。

近世後期の戯作の稿本と板本の表記を比較した先行研究には、仮名字体の用法や、仮名遣いを対象としたものがあり、筆耕が必ずしも作家の表記を反映するわけではなかったことが知られる。内田(二〇〇〇)では馬琴合巻『金毘羅船利生續』(六編、文政一二(一八二〇)年)の稿本と板本の比較によって、筆耕の仙橋・谷金川の仮名字体の使用傾向の特徴を明らかにする。しかし、行末の仮名字

体は取り上げられていない。合巻は絵の周りに文章を配置し行末の位置が区々になるため、語を行末までに収める方法が、行の揃った形式と、異なる可能性がある。行末の下辺が整った体裁の読本において、改めて筆耕の表記を検討する余地がある。

また、馬琴自筆資料の仮名字体の用法を調査した大島（二〇〇〇）では、『南総里見八犬伝』第八輯巻之一（天保三（一八三三）年）の馬琴自筆稿本の仮名字体について、筆耕谷金川が担当した板本の表記と引き比べる。これにより、行頭に關しては仮名字体の使い分けを指摘するが、行末の用字に馬琴や谷金川には取り立てて特徴がなかったのか、行末における仮名字体・漢字の用法については報告がない。ただし、市地（二〇一五・二〇一六）の馬琴読本の板本における仮名字体の調査では、『月水奇縁』『椿説弓張月』に字高の高い仮名字体を行末に使用して余白を埋めたと思われる例を指摘する。一方で、『南総里見八犬伝』肇輯巻之一にはそうした仮名字体の使用傾向は確認できなかった。ほかの文献でも、行末における用字が指摘されるものと、そうでないものがある。こうした資料差は、写本の書写者や、板本の清書を担当した筆耕など、書き手の行末における用字の方法に個人差があったことを示唆する。行末における用字をめぐることは、谷金川以外の筆耕の表記も調査する必要がある。

表1 調査資料と調査範囲

調査資料		調査資料		調査資料		調査資料		調査資料		調査資料	
北條泰時明断録		南総里見八犬伝		昔語質屋庫		調査資料		調査資料		調査資料	
巻之一		第九輯		第八輯		第四輯		第一輯		調査巻	
明断録		八犬伝③		八犬伝②		八犬伝①		質屋庫		略称	
第一回 一丁オ 二丁オ 二丁オ 二丁オ		第七回 一丁オ 二丁オ 二丁オ 二丁オ		第三回 一丁オ 二丁オ 二丁オ 二丁オ		第二回 一丁オ 二丁オ 二丁オ 二丁オ		調査範囲		調査範囲	
松亭金水		曲亭馬琴		著者		著者		著者		著者	
不明		白馬台音成		谷金川		千形仲道		筆耕		筆耕	
不明		森田甲		横田守		中村喜作		影り師		影り師	
河内屋		平兵衛		平兵衛		山崎平八		板元		板元	
稿了年・発行年不明 弘化四（一八四七）年序		天保九（一八三九）年五月 天保一〇（一八四〇）年正月		天保二（一八三三）年五月 天保三（一八三三）年五月		文政三（一八二〇）年六月 文政三（一八二〇）年二月		稿了年・発行年		稿了年・発行年	

とはいえ、馬琴読本は楷書体漢字平仮名混じり文で、句点もつけられる。もともと語と語の切れ目を把握しやすい表記体といえ、用字意識が薄い可能性もある。しかし、中世の写本にみえる行末と区切りへの配慮が引き継がれている側面と、漢字の多さゆえに中世の写本の文字使用と異なる用法が観察されると期待される。以上を踏まえ、行末における区切りに配慮した用字に注目し、稿本と板本の表記を比較する。

三・調査資料と調査範囲

調査資料は、馬琴読本の中でも作家自筆稿本が残存し、かつ板本の清書を担当した筆耕が異なるものを選んだ。嶋岡節亭筆耕の『昔語質屋庫』、『南総里見八犬伝』のうち千形仲道筆耕の第四輯巻之三（八犬伝①）、谷金川筆耕の第八輯巻之二（八犬伝②）、白馬

台音成筆耕の第九輯卷之二十七（八大伝③）である。また、やはり稿本と板本が残存する資料として、松亭金水の読本『北條泰時明断録』を調査資料に含めた（以下、資料はゴシック体の略称で表す）。以上の計五本の資料と調査範囲（小説一章節分）の詳細は表1に示した。

明断録の筆耕は不明だが、稿本では（ア）の仮名字体の大半に使用される【ろ】（ア）36例中32例）が、板本ではすべて【あ】（ア）36例中36例）に書き換えられるなどの違いがある。稿本から板本へ清書の過程があったと判断し、五名の筆耕による清書のあり方から、行末における漢字及び仮名字体の用字を検討した。

四・行末と語と語の切れ目の一致率

まず調査範囲内の行末と語と語の切れ目（一音節語・語末）が一致する割合について述べる。

表2は、各資料の調査範囲における行末に、語と語の切れ目にあたる一音節語・語末が一致している数と、語中で行移りしている数を、総行数に対する割合とともに示したものである。これによればいずれの資料においても、一音節語・語末と行末の一致率は平均七六・四四％と語中で行移りする行を上回る。

ただし、語が分断されないよう文字を選ぶ配慮は、主に平仮名表記語の場合に働くはずである。

そこで、行末に位置する文字種を平仮名と漢字とで分けた上で、平仮名表記の場合に一音節語・語末及び語中で行移りする数がど

れほどあるのかを確認した。

その結果を表3-1「稿本」、表3-2

【板本】に示す。平仮名表記語の語中で

行移りする割合は、全ての

資料において一〇％未満、平均三・五〇％にあたりと分かる。

この平仮名表記語中での行移りの割合は低いといえるのだろうか。仮に、馬琴読本の文章を現代表記に翻刻しても、板本と同じ位置で行移りするならば、割合も表3と同様になるはずである。

そこで現代の組版ならどのようなことになるか比較してみたい。表3と同じ条件で岩波文庫『南総里見八犬伝』の八犬伝①②③と同じ範囲を調査した結果を表4に示した。現代の組版でも平仮名表記語中での行移りの割合は低いが九・九六～一五・四七％、平均一二・七八％という数値は、読本の稿本・板本の場合に平均三・五〇％という数値の有意差を表す。

表3-2についていえば、八大伝①の千形仲道は八・〇一％とほかの筆耕よりも平仮名表記語中で行移りする割合がやや高いが、複合語の形態素の切れ目での行移りの例を差し引くと、五・一

表2 読本の行末と語の位置の関係

		総行数	稿本	板本
質屋庫	稿252 板251	一音節語・語末 が行末と一致	206 81.75%	224 89.24%
		語中が行末	46 18.25%	25 9.96%
八大伝①	312	一音節語・語末 が行末と一致	251 80.45%	249 79.87%
		語中が行末	53 16.99%	62 19.87%
八大伝②	225	一音節語・語末 が行末と一致	159 70.67%	139 61.78%
		語中が行末	63 28.00%	84 37.33%
八大伝③	271	一音節語・語末 が行末と一致	193 71.22%	205 75.65%
		語中が行末	60 22.14%	66 24.35%
明断録	199	一音節語・語末 が行末と一致	153 76.88%	153 76.88%
		語中が行末	43 21.60%	43 21.60%

*語の位置の分類は表3に基づいて算出

表3-1【稿本】行末に位置する文字と語の位置

資料	書手	行末の文字	行末における語の位置とその数				備考
質屋庫	平仮名	166行	一音節語	計 154	自 一音節語	0	行末に届かない1
			語末	割合 61.11%	付 一音節語	38	
		漢字	語中	計 12	自 語中	10(1)	
			割合 4.76%	付 語中	2		
		84行	一音節語	計 52	自 一音節語	1	
			語末	割合 62.63%	付 一音節語	49	
八大伝①	馬琴	214行	語末	計 34	自 語末	3	行末に届かない1
			割合 13.49%	付 語中	32(5)	0	
		漢字	一音節語	計 199	自 一音節語	0	
			語末	割合 63.78%	付 一音節語	44	
		90行	語中	計 15	自 語中	13(8)	
			割合 4.81%	付 語中	2		
八大伝②	馬琴	139行	一音節語	計 52	自 一音節語	3	行末に届かない3
			語末	割合 16.67%	付 一音節語	43	
		漢字	語中	計 38	自 語中	38(4)	
			割合 12.18%	付 語中	0		
		83行	一音節語	計 132	自 一音節語	2	
			語末	割合 58.67%	付 一音節語	24	
八大伝③	馬琴	164行	語中	計 7	自 語中	4(1)	行末に届かない1
			割合 3.11%	付 語中	3		
		漢字	一音節語	計 27	自 一音節語	0	
			語末	割合 12.00%	付 一音節語	27	
		89行	語中	計 56	自 語中	56(11)	
			割合 24.89%	付 語中	0		
明断録	金水	125行	一音節語	計 156	自 一音節語	0	行末に届かない3
			語末	割合 57.56%	付 一音節語	31	
		漢字	語中	計 8	自 語中	2(1)	
			割合 3.00%	付 語中	6		
		71行	一音節語	計 37	自 一音節語	1	
			語末	割合 13.65%	付 一音節語	36	

表3-2【板本】行末に位置する文字と語の位置

資料	書手	行末の文字	行末における語の位置とその数				備考
質屋庫	嶋岡節亭	169行	一音節語	計 166	自 一音節語	0	行末に届かない1
			語末	割合 66.14%	付 一音節語	42	
		漢字	語中	計 3	自 語中	3(3)	
			割合 1.20%	付 語中	0		
		80行	一音節語	計 58	自 一音節語	3	
			語末	割合 23.11%	付 一音節語	51	
八大伝①	千形仲道	231行	語中	計 22	自 語中	38(4)	行末に届かない2
			割合 8.76%	付 語中	0		
		漢字	一音節語	計 206	自 一音節語	0	
			語末	割合 66.03%	付 一音節語	44	
		78行	語中	計 25	自 語中	22(9)	
			割合 8.01%	付 語中	3		
八大伝②	谷金川	113行	一音節語	計 43	自 一音節語	38	行末に届かない1
			語末	割合 14.78%	付 一音節語	0	
		漢字	語中	計 37	自 語中	37(2)	
			割合 11.78%	付 語中	0		
		111行	一音節語	計 105	自 一音節語	2	
			語末	割合 46.67%	付 一音節語	88	
八大伝③	白馬台音成	172行	語中	計 8	自 語中	4(1)	行末に届かない1
			割合 3.56%	付 語中	4		
		漢字	一音節語	計 34	自 一音節語	4	
			語末	割合 15.11%	付 一音節語	29	
		99行	語中	計 77	自 語中	77(8)	
			割合 34.22%	付 語中	0		
明断録	不明	120行	一音節語	計 168	自 一音節語	0	行末に届かない3
			語末	割合 61.99%	付 一音節語	32	
		漢字	語中	計 4	自 語中	2(1)	
			割合 1.48%	付 語中	2		
		76行	一音節語	計 37	自 一音節語	0	
			語末	割合 13.65%	付 一音節語	37	

表3-1、3-2凡例

- *平仮名の合字は「平仮名」に含めた。
- *「𛄀」は、くの字点や踊り字は「平仮名」、漢字の𛄀字は「漢字」に分類した。
- *八大伝①のカタカナは、助数詞「五ツ」(語末、稿本・板本)、「なんど」(語中、稿本)である。
- *単語は、古典文法の品詞分解に基づいて分けた。その上で、行末における語の位置を分類した。
- *「自」は自立語、「付」は付属語を表す。
- *「一音節語」には、一音節の名詞や助詞のほか、活用語も含まれる。
- *漢字熟語以外の「自立語 語中」複合語の意味の切れ目が行末に位置している用例数を()内に示した。
- *接尾辞についてはその派生語を一語と見なして語に位置を認定した。
- *助動詞が接続する活用語について、「あらず」など文節単位がひとまとまりとして捉えられるものもあるが、活用語尾と助動詞の切れ目で移行している場合は活用語尾を「語末」と見なした。
- *漢字が行末に位置する場合の「自立語 語中」には、漢字熟語、漢字で表記された和語の語中、漢語や変動詞などを含み、漢字+ひらがなの複合語の漢字が行末に位置している場合も該当する。
- *割合は、いずれも総行数に対するものである。

表4 岩波文庫の八大伝における語と行末の関係

資料	行末の文字	行末における語の位置とその数						備考
		一音節語		自立語		二音節語		
八大伝①	平仮名 170行	語末	計	127	自立語	一音節語	2	総行数28／行末にカタカナ2 行末に届かない6
			割合	45.68%			42	
		語中	計	43	自立語	二音節語	69	
			割合	15.47%			14	
	漢字 100行	語末	計	57	自立語	一音節語	3	
			割合	20.50%			54	
		語中	計	43	自立語	二音節語	0	
			割合	15.47%			0	
八大伝②	平仮名 140行	語末	計	109	自立語	一音節語	3	総行数240／行末に届かない4
			割合	45.42%			39	
		語中	計	31	自立語	二音節語	50	
			割合	12.92%			17	
	漢字 96行	語末	計	49	自立語	一音節語	2	
			割合	20.42%			47	
		語中	計	47	自立語	二音節語	0	
			割合	19.58%			0	
八大伝③	平仮名 158行	語末	計	130	自立語	一音節語	0	総行数281／記号12 行末に届かない12
			割合	46.26%			34	
		語中	計	28	自立語	二音節語	78	
			割合	9.96%			18	
	漢字 109行	語末	計	48	自立語	一音節語	5	
			割合	17.08%			42	
		語中	計	61	自立語	二音節語	0	
			割合	21.71%			1	

*凡例は表3に同じ。
*「記号」は割書を表す〔 〕の閉じる括弧のこと。

三％まで下がる。また、筆耕の中でも、特に質屋庫の嶋岡節亭は一・二〇％と平仮名表記語中での行移りが少ない⁽¹⁸⁾。

以上、まずは稿本・板本ともども、行末において語の切れ目を意識した表記が行われていたといえよう。ただし、馬琴自筆稿本で平仮名表記語中での行移りが三〜四％であることと対照的に、筆耕においては、平仮名表記語中での行移りの割合にバラつきがある。次節では筆耕が稿本の漢字及び平仮名を書き換えている行末における用例から、語を行末までに収める用字について述べる。

五・行末における用字

ここでは稿本から書き換えが生じている板本の行末の語の表記に注目し、筆耕の用字について述べる。そもそも、稿本から板本の表記への清書では、行移りの位置がずれるのが常態であった。表5に、稿本と板本とで行末の位置が一致する数とその割合を示した。割合には六・二二〜二九・六四％と幅があるものの、大勢の行は位置がずれることが分かる。稿本には語や文の挿入指示があり、筆耕はそれに応じつつ清書を行う。そのため、稿本で行中であつた言葉が清書で行末に移ることは、頻繁に生じることだったのである。

その清書中に、語を行末までに書き入れるための用字を行つたと考えられる一・漢字と平仮名の書き換え、二・振り仮名と本行の平仮名の構成変更、三・仮名字体の書き換えについて指摘する。

五・一・漢字と平仮名の書き換え

漢字と平仮名での書き換えは、漢字を平仮名に開く、或は平仮名の語を漢字に改めることで、文字数を増減させる表記である。各資料の用例数と、語が分断されるのを回避したと考えられる行末及び行末近くにおける用例数を表6に示す。

表5 行総数と稿本と板本での行末の一致

	質	八①	八②	八③	明
稿本 総行数	252	312	225	271	199
行末一致	22	36	14	42	59
	8.73%	11.53%	6.22%	15.49%	29.64%
板本 総行数	251	312	225	271	199

表6 漢字と平仮名での書き換え

	質	八①	八②	八③	明
漢字と平仮名での書き換え	全体	行末	全体	行末	全体
①【稿】草書体漢字→【板】平仮名	9	3	4	2	3
②【稿】平仮名→【板】草書体漢字	10	3	7	3	2
③【稿】平仮名 →【板】振り仮名付きの草書・楷書体漢字	4	3	0	0	0
④【稿】振り仮名付きの楷書体漢字 →【板】平仮名	3	1	2	0	0
⑤【稿】振り仮名付きの草書体漢字 →【板】平仮名	8	0	0	0	0
合計/行末合計	34	10	13	5	5

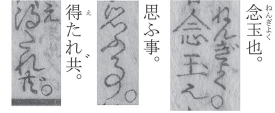


図2 八犬伝①より

表6①②の「草書体漢字」は、「也」「事」「思」「共」などを簡略化した漢字字体である(図2)。振り仮名はつかず、濁点がつくこともある(図2「共」)。黄表紙のような平仮名文にも使用されることがある平易な漢字字体であり、楷書体漢字・振り仮名がついている草書体漢字とは質が異なると判断し、区別している。

表6を一見して、全体の用例数及び行末の用例数ともに、筆耕ごとにバラつきがあると分かる。例えば質屋庫の嶋岡節亭は全体としても行末においても用例数が多く、八犬伝②の谷金川に行末での用例はない。具体的な用例を次に挙げる。

①【稿】草書体漢字→【板】平仮名表記

質屋庫

- (1) 十六丁ウ L7 これ也。同書 ↓ L3 こまあり。一同書
(2) 廿二丁オ L5 あらぬもの也。 ↓ L4 あらぬものあり。一
(3) 廿四丁オ L1 自業自得也。 ↓ 廿三丁ウ L10 自業自得あり。一
(4) 八丁オ L3 孝士也。 ↓ L2 孝士なぞ。一

- (5) 十四丁オ L5 逗留也。縦同胞 ↓ L5 逗留あり。縦一同胞

八犬伝③

- (6) 四丁ウ L8 樵六也。 ↓ L8 樵六あり。一

②【稿】平仮名→【板】草書体漢字

質屋庫

- (7) 十五丁ウ L9 別一号あり。為義 ↓ L6 別号也。一為義
(8) 十五丁ウ L11 造せらる。一最上の大刀ありなれば。造らせらる。最上の大刀也一けまべ。
(9) 廿一丁オ L5 謀り一給ふとも。終ふ
↓ 廿一丁ウ L3 謀り給ふ共。終ふ一

八犬伝①

- (10) 三丁ウ L10 恨となり。 ↓ L10 恨と也。一

- (11) 十二丁ウ L5 おろを得されども。
↓ L5 おろを得され共。一

- (12) 十四丁オ L2 宿借るとも。 ↓ L1 宿借る共。一

③【稿】平仮名→【板】振り仮名付きの草書・楷書体漢字

質屋庫

- (13) 十七丁ウ L7 もい一め ↓ L6 初一
(14) 廿一丁ウ L2 ふうく ↓ 廿一丁オ L11 深く一
(15) 廿二丁ウ L11 この時宗 ↓ L9 此時宗一
(16) 五丁オ L8 うち鳴して ↓ L8 打一鳴して
(4) 【稿】振り仮名付きの楷書体漢字→【板】平仮名

質屋庫

(17) 十四丁ウ L5 この比頼光 ↓ L2 おのころ 一頼光

八犬伝③

(18) 十二丁オ L1 那義を以せしうべ。 ↓ L1 那義をもて一せしうべ

明断録

(19) 一丁ウ L6 因て。 ↓ L6 よりて。 一

⑤【稿】振り仮名つきの草書体漢字 ↓ 【板】平仮名

明断録

(20) 十丁オ L9 是も ↓ L9 これも 一

②の草書体漢字には文末の指定辞ナリの書き換えが目立つ。質屋庫の用例(8)に注目すると、通常、助動詞が下接する連用形のナリは平仮名表記で書かれる(例…十六丁オ L3「おなじようになりければ」が「大刀也」ければ。」と漢字表記にされている。「な一り」のように語が分断されるのを回避して行末では漢字表記にしたと考えられる。

③の漢字表記に関しては、質屋庫の用例(13)「初」、明断録の用例(16)「打一鳴して」(複合動詞)の「はじめ」「うち」の平仮名表記が、調査範囲内の行中(質屋庫廿二丁オ、明断録五丁オ)に確認できる。ほかの用例においても、平仮名表記、漢字表記の両方が本文中に表れる。右に挙げた用例が行末近くで書き換えの生じている例であることには、やはり語を収めるためだったと考えられよう。なお、八犬伝③の(18)は語よりも大きい区切りを意識したものと考えられる。

表7 振り仮名と本行の平仮名との構成変更

	質	八①	八②	八③	明
	全体	行末	全体	行末	全体
振り仮名と本行の平仮名との構成変更	全体	行末	全体	行末	全体
①【稿】本行の送り仮名 →【板】振り仮名に組み込む	13	6	1	0	2
②【稿】振り仮名につく活用語尾 →【板】本行に組み込む	8	2	2	0	1
③【稿】本行の助詞 →【板】振り仮名に組み込む	2	0	0	0	1
④【稿】振り仮名につく助詞 →【板】本行に組み込む	1	0	0	0	0
合計/行末合計	24	8	3	0	4

五・二・振り仮名と本行の平仮名の構成変更

振り仮名と本行の平仮名との構成変更は、「定めて」を「定めて」とするような書き換えにより、本行の文字数を増減させる表記である。用例の全体数と行末までに語を収めたと考えられる用例数を表7に挙げる。語を収めるためと考えられる用例は質屋庫、明断録にのみ確認できた。具体的な例を次に挙げる。

①【稿】本行の送り仮名 ↓ 【板】振り仮名に組み込む

質屋庫

(21) 十三丁ウ L1 一出づ。 ↓ 十三丁オ L1 出。 一

(22) 十三丁ウ L3 銅金造り ↓ L1 銅金造一

(23) 十四丁オ L11 切りせま ↓ L8 切せて一

(24) 十五丁オ L1 進み ↓ L14 進一ふより

(25) 二十丁ウ L2 図ちぎ ↓ 十九丁オ L10 図ちぎ一

(26) 廿二丁ウ L8 鈴餅ひあつく ↓ L6 鈴餅一あつく

明断録

(27) 一丁ウ L10 一思召立 ↓ L10 思一召立

(28) 四丁ウ L10 貧一ふくして。 ↓ L10 貧く一あて。

(29) 七丁オ L9 問ふに。 一 ↓ L9 問ふ。 一

(30) 十丁ウ L2 一平らうあらび ↓ L1 平うあらび一

② 【稿】振り仮名につく活用語尾 ↓ 【板】本行に組み込む

質屋庫

(31) 十三丁ウ L5 問ねど名を ↓ L3 問へねど一名を

(32) 十五丁ウ L1 撃とり々々。その、ち

↓ 十五丁オ L8 撃ちたり々々。一その、ち

明断録

(33) 三丁オ L1 始とーて ↓ L1 始め一として。

(34) 八丁オ L7 見定一がとた ↓ L7 見定め一がとた

(35) 八丁ウ L8 障ゆる一 ↓ L8 障りある一

明断録(29)(30)、質屋庫(31)の用例は、語よりも大きい単位での行移りを回避したものである。また、①に該当する質屋庫(24)は、語中の行移りを回避できなかった例である。

①の明断録の用例⑦「思召立」、②の用例(33)「始め」、(34)「見定め」は、他の箇所「思召」(二丁ウ)「始め」(三丁オ)「定一め」(十丁ウ)と稿本の時点で活用語尾が振り仮名につけられた例、送り仮名になっている例が存する。②の質屋庫の用例(32)「撃ちたりける」の「撃つ」には、本文行中に「撃ん」(十五丁オ)と活用語尾を送らない例もある。明断録の筆耕の場合は、表記を揃えた可能性も考えられるが、いずれも書き換えることによって語と語の切れ目が行移りと一致する例である。

五・三・仮名字体の書き換え

行末及び行末近くで、字高の高い仮名字体に書き換えて、行末までの表記余白を埋めたと考えられる場合(図1のような例が該当する)と、書くスペースを省略できる仮名字体を使用して語を行末までに区切りよく収めたと考えられる例を挙げる。

表記余白の広さ・狭さ、それに対する仮名字体の字高やスペースを省略できる形状の判断は観察者の主観に頼ることになる。筆耕が書き換える仮名字体を取り上げるとはいえ、本稿でも板本の匡郭の下辺付近の表記余白と使用仮名字体の相関性の判断は稿者による。そこで、次の五点に当てはまる用例のみを挙げる。

1 行末及び行末近くで筆耕が仮名字体を書き換えていること
2 本文中で通常使用している仮名字体に対し使用数が少ない
仮名字体に書き換えていること

3 本文中で通常使用している仮名字体に比べ、字高が高い・書くスペースを省略できるという形状の特徴を有すること
4 本文中で通常使用している仮名字体を書き入ると行末までの空白が余る乃至は狭いと考えられること

5 語の区切りと行移りが一致していること

①字高の高い仮名字体を使用し行末までの余白を埋める

質屋庫

(36) 十四丁オ L1 被つといへども。

↓ 十三丁ウ L9 被^{かく}と一いへども。

(37) 十五丁オ L3 得^えより々々。 ↓ 十四丁ウ L11 得^えより々々。 一

表8 行末における仮名字体の書き換え

	稿本	板本	数	行途中	行末	行末	行末
	「一」	177	164	5	8	0	0
	「一」	53	53	0	0	0	0
	「一」	10	9	0	1	0	0
	「一」	31	23	3	5	0	0
	「一」	8	8	0	0	0	0
	「一」	1	1	0	0	0	0
	「一」	3	3	0	0	0	0
	「一」	1	1	0	0	0	0
	「一」	95	86	5	3	1	1
	「一」	53	52	1	1	0	0
	「一」	121	106	10	3	2	2
	「一」	9	8	0	1	0	0
	「一」	4	0	0	4	0	0
	「一」	1	0	0	1	0	0
	「一」	1	0	0	1	0	0
	「一」	1	0	0	1	0	0
	「一」	16	15	1	0	0	0
	「一」	138	130	3	5	0	0
	「一」	10	10	0	0	0	0
	「一」	6	6	0	0	0	0
	「一」	5	4	0	1	0	0
	「一」	5	4	1	0	0	0
	「一」	2	2	0	0	0	0
	「一」	1	1	0	0	0	0
	「一」	34	33	0	0	1	1
	「一」	387	346	17	24	0	0
	「一」	4	3	0	0	1	1
	「一」	36	27	2	7	0	0
	「一」	9	6	3	0	0	0
	「一」	51	51	0	0	0	0
	「一」	180	162	8	8	1	1
	「一」	5	3	0	2	0	0
	「一」	26	25	1	0	0	0
	「一」	123	117	3	3	0	0
	「一」	6	5	1	0	0	0
	「一」	7	7	0	0	0	0
	「一」	3	2	0	1	0	0
	「一」	3	3	0	0	0	0
	「一」	2	2	0	0	0	0
	「一」	2	1	0	1	0	0
	「一」	10	10	0	0	0	0
	「一」	161	148	9	3	1	1
	「一」	4	4	0	0	0	0
	「一」	20	17	3	0	0	0
	「一」	3	2	0	1	0	0

*「一」は稿本と板本においてそのまま引き継がれた仮名字体、「一」は稿本と板本とで書き換えがあった仮名字体を表す。
 *板本の行末において書き換えられた仮名字体の用例数に網掛けをした。
 *板本における仮名字体の使用数と行末における書き換えの数が一致している箇所に網掛けをした。

漢字と平仮名による書き換え、振り仮名
 以上、行末における用字を確認した。
 さて、以上の用例の仮名における字体ごとの使用数と稿本と板本における全体的な書き換えの数を表8に示した。⁽²²⁾ 行末に特別書き換えて使用している仮名字体は、質屋庫の「一」、⁽²³⁾ 行末近くに使用される「一」のみといえる。

(48) 三丁ウ L1-2

内へへ

(47) 五丁ウ L1

内へへ

(46) 十三丁オ L4

いふへ

(45) 十三丁オ L3

いふへ

(44) 廿六丁オ L6

いふへ

(43) 廿六丁オ L3

いふへ

(42) 廿四丁オ L2

いふへ

(41) 廿一丁ウ L1

いふへ

(40) 十九丁オ L4

いふへ

(39) 十七丁ウ L5

いふへ

(38) 十五丁オ L11

いふへ

(37) 五丁ウ L1

いふへ

(36) 十三丁オ L4

いふへ

(35) 十三丁オ L3

いふへ

(34) 廿六丁オ L6

いふへ

(33) 廿六丁オ L3

いふへ

(32) 廿四丁オ L2

いふへ

(31) 廿一丁ウ L1

いふへ

(30) 十九丁オ L4

いふへ

(29) 十七丁ウ L5

いふへ

(28) 十五丁オ L11

いふへ

(27) 五丁ウ L1

いふへ

(26) 十三丁オ L4

いふへ

(25) 十三丁オ L3

いふへ

(24) 廿六丁オ L6

いふへ

(23) 廿六丁オ L3

いふへ

(22) 廿四丁オ L2

いふへ

(21) 廿一丁ウ L1

いふへ

(20) 十九丁オ L4

いふへ

(19) 十七丁ウ L5

いふへ

(18) 十五丁オ L11

いふへ

(17) 五丁ウ L1

いふへ

(16) 十三丁オ L4

いふへ

(15) 十三丁オ L3

いふへ

(14) 廿六丁オ L6

いふへ

(13) 廿六丁オ L3

いふへ

(12) 廿四丁オ L2

いふへ

(11) 廿一丁ウ L1

いふへ

(10) 十九丁オ L4

いふへ

(9) 十七丁ウ L5

いふへ

(8) 十五丁オ L11

いふへ

(7) 五丁ウ L1

いふへ

(6) 十三丁オ L4

いふへ

(5) 十三丁オ L3

いふへ

(4) 廿六丁オ L6

いふへ

(3) 廿六丁オ L3

いふへ

(2) 廿四丁オ L2

いふへ

(1) 廿一丁ウ L1

いふへ

(0) 十九丁オ L4

いふへ

(-1) 十七丁ウ L5

いふへ

(-2) 十五丁オ L11

いふへ

(-3) 五丁ウ L1

いふへ

(-4) 十三丁オ L4

いふへ

(-5) 十三丁オ L3

いふへ

(-6) 廿六丁オ L6

いふへ

(-7) 廿六丁オ L3

いふへ

(-8) 廿四丁オ L2

いふへ

(-9) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-10) 十九丁オ L4

いふへ

(-11) 十七丁ウ L5

いふへ

(-12) 十五丁オ L11

いふへ

(-13) 五丁ウ L1

いふへ

(-14) 十三丁オ L4

いふへ

(-15) 十三丁オ L3

いふへ

(-16) 廿六丁オ L6

いふへ

(-17) 廿六丁オ L3

いふへ

(-18) 廿四丁オ L2

いふへ

(-19) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-20) 十九丁オ L4

いふへ

(-21) 十七丁ウ L5

いふへ

(-22) 十五丁オ L11

いふへ

(-23) 五丁ウ L1

いふへ

(-24) 十三丁オ L4

いふへ

(-25) 十三丁オ L3

いふへ

(-26) 廿六丁オ L6

いふへ

(-27) 廿六丁オ L3

いふへ

(-28) 廿四丁オ L2

いふへ

(-29) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-30) 十九丁オ L4

いふへ

(-31) 十七丁ウ L5

いふへ

(-32) 十五丁オ L11

いふへ

(-33) 五丁ウ L1

いふへ

(-34) 十三丁オ L4

いふへ

(-35) 十三丁オ L3

いふへ

(-36) 廿六丁オ L6

いふへ

(-37) 廿六丁オ L3

いふへ

(-38) 廿四丁オ L2

いふへ

(-39) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-40) 十九丁オ L4

いふへ

(-41) 十七丁ウ L5

いふへ

(-42) 十五丁オ L11

いふへ

(-43) 五丁ウ L1

いふへ

(-44) 十三丁オ L4

いふへ

(-45) 十三丁オ L3

いふへ

(-46) 廿六丁オ L6

いふへ

(-47) 廿六丁オ L3

いふへ

(-48) 廿四丁オ L2

いふへ

(-49) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-50) 十九丁オ L4

いふへ

(-51) 十七丁ウ L5

いふへ

(-52) 十五丁オ L11

いふへ

(-53) 五丁ウ L1

いふへ

(-54) 十三丁オ L4

いふへ

(-55) 十三丁オ L3

いふへ

(-56) 廿六丁オ L6

いふへ

(-57) 廿六丁オ L3

いふへ

(-58) 廿四丁オ L2

いふへ

(-59) 廿一丁ウ L1

いふへ

(-60) 十九丁オ L4

いふへ

と本行の平仮名の構成変更、仮名字体の書き換えは、総じて語末・一音節語と行末の一致率が極めて高い嶋岡節亭筆耕の質屋庫に確認できた。確かに行末までに語を収める用字は行われていたといえる。

しかし、書き換えは行末に限ったことではなく、むしろ行中の用例数に対して少ない。行末にのみ特別な用字を行っていたわけではない。ただし、これは清書の過程で行の位置に関係なく稿本の表記をよく書き換える筆耕が、稿本の表記のままでは匡郭までに語を区切りよく収めることができない際に、行末において表記を書き換えることがあったのだと稿者は考える。

六・まとめ

以上、馬琴読本を中心とした稿本と板本における行末の区切りと用字の関係について確認した。これにより、馬琴読本は語末・一音節語と行末の一致率が高く筆耕においては行末までに語を収める用字を行うことがあると明らかにした。その用字として、行末及び行末近くで、漢字と平仮名の書き換え、振り仮名と本行の構成変更により、文字を増減させて調整すること、また、余白に合わせて仮名字体を書き換え、行末までに語を収めたと考えられる例も確認した。これらは中世の漢字平仮名混じり文・平仮名文の写本における表記との連続性も窺えようが、資料の体裁や表記体からして同一視しては扱えず、近世後期の板本の一特色として捉える必要がある。

当時の書き手が語の区切りをどのように捉えていたかは検証の余地が残る。また、いずれの本も語末・一音節語と行末が一致する割合が高いにも関わらず、筆耕ごとに行末における用字の個人差が見受けられ、行末と区切りを合わせる配慮が一概に用字に基づくとはいえない²⁴。しかし、行移りと区切りに注意を払って用字を行う筆耕が確かにいたことは示すことができたと考ええる。

注

(1) 正徹本徒然草(佐々木二〇一八)、野ざらし紀行の天理本・画卷本(濱一九九九)、元禄一五年板『おくのほそ道』、寛延三年板『教訓私儘育』(木越一九九三、p.155)、喃本『鹿の子餅』(前田一九九八、p.156)に指摘される。なお、矢野(二〇〇一)で草双紙の行頭と自立語頭・付属語頭の一致率が高いことを明らかにする。

(2) 本稿では、字母の異なる仮名と、字母を同じくして画数・くずし方の違いによって見た目を異にする仮名を区別し、「仮名字体」「字体」と呼ぶ。また、その仮名字体が該当するイロハ四十七にんを加えた四十八の仮名を、抽象的な単位として「仮名」と呼ぶ。

(3) 本稿では書き手が意識的に文字を使用することを「用字」と呼ぶ。小松(二〇〇六、p.126-127)では、高野切の第一種・第二種にそれぞれ2例ずつある漢字表記の「花」について、いずれも行末にあたり、該当箇所の行末に平仮名二文字分の余白がないことから、行末に「は」のみを残して「さくらは」と助詞として捉えられてしまうことを避け、漢字表記一文字にしたと考察する。また、定家筆の仮名テキストにおいて、行末に三文字分の余白がなければ「はかり」とせず「許」と漢字表記する場合にも同様の表記原理が存するとも指摘する。

(5) 以下、抽象的な単位としての仮名はカタカナをへゝに入れ、仮名字体は【】に入れた示す。字母は《》に入れた示す。仮名字体の表示はUnicode10.0に収録されたものはIPam明朝(©独立行政法人情報処理推進機構)、収録外の仮名字体は学術情報交換用変体仮名(<https://kananijal.ac.jp/>)に拠る。なお、今回、使用位置について検討対象としない仮名字体、【㍑】【㍓】【㍔】【㍕】【㍖】【㍗】【㍘】【㍙】【㍚】【㍛】【㍜】【㍝】【㍞】【㍟】【㍠】【㍡】【㍢】【㍣】【㍤】【㍥】【㍦】【㍧】【㍨】【㍩】【㍪】【㍫】【㍬】【㍭】【㍮】【㍯】【㍰】は【く】【と】【も】に包摂し、【ろ】は【ろ】、【る】は【る】に代用して表示した。

(6) 本稿では、仮名字体の形状に関して縦幅のことを「字高」と呼ぶ。
(7) 坂口(一九八三) p.93に、虎明本狂言は行末第二・三字に、【す】【き】(通常【ま】【り】)が使用される例も挙げられる。断本は前田(一九九七) p.198-199。馬琴読本は市地(二〇一五・二〇一六)による。弓張月には【い】が主用される中で【お】2例中2例を行末第二・三字に使用し、行末までの余白を埋めたと考えられる例がある。

(8) 植(一九七九) p.4により定家筆本の【二】【一】【目】【三】、坂口(一九八三) p.93により虎明本狂言の【ま】【つ】(通常【一】【は】【け】)が指摘されている。

(9) 読本のような整版印刷本は、作家自身が版下を作成することもあったものの、作家が書いた稿本を筆耕が清書して版下を作成し、彫り師が板本を制作、作家の校正を経つつ印刷・出版に至る工程であった。

(10) 合巻を対象とした内田(一九九八)(二〇〇〇)がある。

(11) 黄表紙を対象として矢野(一九九七)(二〇〇二)、人情本を対象として木川(二〇一八)による仮名遣いの調査がある。

(12) 大島(二〇〇〇) p.33-34では、筆耕の書き換えを踏まえて、馬琴読本の行頭には【ま】【き】が使用されることを指摘した。

(13) 稿本は卷之五の裏表紙に稿丁年月日や「筆福祝壽」「大吉利市」の

文字が書かれた、筆耕に渡した最終稿と目される。比較する板本は、馬琴のものについては初版本相当とされている本とした。

(14) 質屋庫は卷之五の刊記に嶋岡節亭・鈴木武箇の筆耕名が記され、担当箇所は明記されていない。全巻が嶋岡節亭筆の「常夏草紙」(文化七年、同じく鈴木武箇筆の『松染情史秋七章』(文化六年)の書風と照らし合わせ、質屋庫卷之一、三、四が嶋岡節亭と判断した。

(15) 八犬伝の自筆稿本四十六冊が残る中で、筆耕谷金川は全六百冊にのぼる八犬伝のうち六十冊に携わっており、彫り師の横田守は十四冊を担当する。八犬伝を通じて最も担当箇所が多い両者が携わる第八輯卷之二を選んだ。この筆耕を軸とし、別の筆耕が担当した箇所として比較可能な九輯卷之二十七、四輯卷之三を選択した。

(16) 松亭金水(寛政九(一七九七)年-文久二(一八六三)年)は、書家の谷金川の弟子で、馬琴の板下書きもしていた人情本作家である。馬琴の死後、読本『朝夷嶋巡記』続編などを執筆し、板元の注文に応じた執筆活動を展開した。『日本古典文学大辞典』第三卷、岩波書店、一九八四年、武藤元昭氏執筆項目)

(17) 岩波文庫一九九〇年版(小池藤五郎校訂、一九八四-一九八五年の文庫化)による。八犬伝①=「南総里見八犬伝(一)」p.296-298、八犬伝②=「同(四)」p.296-313、八犬伝③=「同(八)」p.139-158。

(18) 質屋庫板本の語中における行移りの用例は「信じ」がたし(一七丁オ)「敵し」がたし(二六丁オ)「まうし」きつて(二二丁オ)といずれも複合語の形態素の切れ目である。

(19) 質屋庫の用例(14)「深く」は、平仮名表記を漢字表記に改める例が調査範囲内の行中にもう1例(廿三丁ウ)存する。これを鑑みると、行末ゆえに書き換えた用例として疑義が生じるが、卷之三には「ふかく」1例(四丁ウ)を稿本の平仮名表記のまま反映している

のを確認できる。このことから、巻之一の調査範囲内では行末で漢字表記に改めた用例に合わせて漢字表記に揃え、巻之三は書き換えが発生しなかったためにそのままを反映したと考えられよう。

- (20) 坂口(一九八三)に「この表記余白に関わる仮名の用法は、いささか微妙な問題で、あるいは筆者の思い入れもあるかと思うが」(p.56)とある。

- (21) 弓張月の行末の〈シ〉には【】のみが使用され、スペースを省略したと考えられる例もあった。

- (22) 各資料の調査範囲内における仮名字体の種類数等の基礎情報は次の表の通りである。

	仮名字体の種類数	橋本と板本間で一致する仮名字体の数	橋本と板本とで別の仮名字体になる数	対照可能総数
質屋庫	八三	八一	七二	一五七六
八犬伝①	九五	九三	九一	一八〇〇
八犬伝②	八三	八四	七九	一四八三
八犬伝③	七九	七三	七〇	一七五二
明断録	七九	七三	七一	一七五二

- (23) 行末に《耳》を字母とする仮名字体が使用される傾向は、『おくのほそ道』『教訓私儘育』(木越一九九二)、『野ざらし紀行』(濱一九九九)、月水奇縁、弓張月(市地二〇一六)に指摘される。

- (24) 平仮名表記語中での行移りの割合が極めて低い八犬伝②の谷金川は、ほぼ行末で区切りを合わせる用字を行っていない。最も平仮名表記語中での行移りが多かった八犬伝①の千形伸道も行末で漢字を平仮名に開くことがあるにも関わらずである。谷金川は嶋岡節亭・千形伸道らより一文字一文字の書体が平板であり、字詰めが狭い。こうした書体・字詰のレイアウトによって行末と語の区切りを

一致させたとみられる。

参考文献

- 市地英(二〇一五)「馬琴読本の平仮名字体―『月水奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に―」『成蹊國文』四八号、p.133-157
- 市地英(二〇一六)「馬琴読本『月水奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴」『成蹊國文』四九号、p.125-148
- 植真代子(一九七九)「藤原定家の変体仮名用法について」『国文学攷』八二号、p.1-24
- 内田宗一(一九九八)「修紫田舎源氏」の仮名字体―作者自筆稿本と板本の比較考察―」『待兼山論叢』三二号、p.15-27
- 内田宗一(二〇〇〇)「馬琴作合巻『金毘羅船利生籠』の仮名字体―筆耕による表記の変更をめぐって―」『国語文字史の研究』五、和泉書院、p.145-168
- 大島悦子(二〇〇〇)「曲亭馬琴の文字意識―自筆資料の仮名字体について―」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』一〇号、p.19-28
- 木川あづさ(二〇一八)「春色梅児誉美」の仮名づかいをめぐって」『言語文化研究』一七号、p.1-15
- 木越治(一九九二)「近世文学作品における字母の用法について―『ますらを物語』『おくのほそ道』『教訓私儘育』の場合―」『国語文字史の研究』一、和泉書院、p.180-232
- 坂口至(一九八三)「虎明の表記意識」『文獻探究』一一号、p.50-60
- 佐々木勇(二〇一八)「正徹本『徒然草』の行末に見られる区切りへの配慮」『論叢国語教育学』一四号、p.40-49
- 濱森太郎(一九九九)「野ざらし紀行画巻」の行頭・行末処理―行頭・行末のレイアウトに伴う用字変化について―」『三重大学日本語学文学』一〇号、p.93-105

前田桂子（一九九八）『鹿の子餅』の仮名もじ遣い（一）——字体と出現位置を中心に——『字部国文研究』一九九号、pp.195-210

矢野準（一九九七）『黄表紙類（草稿本・整板本）の表記：京伝黄表紙三種を中心に』『香椎潟』四二号、pp.39-58

矢野準（二〇〇一）『草双紙の行——京伝黄表紙三種を中心に——』『筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念論文集』風間書房、pp.147-166

矢野準（二〇〇二）『草双紙類の仮名遣い——石原知道浄書合巻類四種を資料として——』『国語と国文学』七九卷一一号、pp.73-85

調査資料

昔語質屋庫「稿本」ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション蔵、Sheil locator: Sorimachi 186／「板本」『馬琴中編読本集成』第二二卷、汲古書院、二〇〇二年／南総里見八犬伝「稿本」八犬伝①（第四輯巻之三）都立中央図書館加賀文庫蔵、請求記号：加827／八犬伝②（第八輯巻之二）早稲田大学図書館蔵、請求記号：イ04_00600_0002／八犬伝③（第九輯巻之廿七）早稲田大学図書館蔵、請求記号：イ04_00600_0016／「板本」国立国会図書館蔵、請求記号：本別32／北條泰時明断録「稿本」都立中央図書館特別買上文庫蔵、請求記号：563-1「板本」早稲田大学図書館蔵、請求記号：く13_03367

*資料の閲覧にあたり以下のデータベースを利用した。【THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY DIGITAL COLLECTION】<https://digitalcollections.nypl.org/> 【国立国会図書館デジタルコレクション】<http://dl.ndl.go.jp/> 【早稲田古典籍総合DB】<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/> 【国文学研究資料館 日本古典籍総合目録データベース】<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/>

（いちじ）・えい 追手門学院大手前高等学校非常勤講師）